

2020年 3月 2日

日本災害復興学会 2018年度研究会
活 動 実 績 報 告 書

<研究会名称>

復興ワードマップ研究会

代表者	近藤誠司
企画分担者	石原凌河
	木戸崇之
	李 勇昕
	宮前良平
	大門大朗
	立部知保里
	宮本匠

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

【課題、目的】 この研究活動を行った動機や目的を記入してください。
・災害復興の分野で使われている用語が本来意味していたことは何か、その用いられ方がどのように変化したのかを明らかにすることで、災害復興の課題や可能性を考える。
災害復興の分野では、新しい言葉が次々と生まれてきた。その中には、短期間のうちに消費され、耳にしなくなるものも少なくない。そして、忘れられたところに、類似のまた新しい用語として、その概念が復活したり、議論が再開されたりすることもまた少なくない。
このような状況において、災害復興の課題やその解決の可能性を考えるにあたり、もう一度、ひとつひとつの言葉の意味を大切にし、それが本来意味していたことは何であったか、それはどのような文脈からそもそも議論が始まったのか、そしてどのようにその用いられ方に変化があったのかをつぶさにみるのが重要ではないかという考えに至り、本研究会を結成した。



【実施方法、内容】 この研究活動の実施方法、内容を記入してください。
・定期的な研究会（2か月に一度、合計13回）を開催し、それぞれに検討した災害復興の用語について話題提供を行い、議論を行った。
実施方法として、2か月に1度の頻度で定期的な研究会を開催し、代表者、企画分担者、それぞれが関心を持った災害復興の用語について、用語の誕生から現在に至る意味の変遷について話題提供を行い、議論を深めた。
議論を進める際は、ただ用語の変遷を追うだけでなく、その背景にある社会状況の変化や、災害の特徴などの文脈にも着目した。さらに、用語の誕生や変遷の背景に、どのような人々の考えや社会通念の変化が見られるのかについて理論的な検討も行った。この一連の作業を踏まえて、それぞれが話題提供した用語の間にどのような共通点が見られるのかについて議論を行った。



【活動成果】 この研究活動で得られた成果を記入してください。
・研究成果を学会大会の分科会で報告するとともに、学会誌への論文投稿、また学会ウェブサイトにも研究会の詳細な議事録を掲載した。
各年の研究成果は、広く学会員と共有するために、学会大会で分科会を開催し（2018年度東京大会、2019年度鳥取大会）、研究成果を報告するとともに、学会員にも議論に加わってもらい、研究の進展を試みた。
また、一連の議論をまとめたものを論文にまとめ、学会誌「復興」に投稿した（in printing）。具体的な研究成果については、添付した論文を参照されたい。また、各会の研究会の詳細な議事録を学会ウェブサイトに掲載した（URLを下段に記載）。論文へと至る本研究会での議論がどのようなものであったのかは、この研究会議事録を参照することで確認することが出来る。
復興ワードマップ研究会 サイト http://f-gakkai.net/modules/tinyd2/

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。

(例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等)

本研究会の実施により明らかになったことは、災害復興の議論において、「よりよい復興」を下支えする「よりよい社会」とはどのようなものであるか、そのための価値観、パラダイムが欠けているのではないか、ということである。

そこで、本研究会は今年度で区切りをつけ、来年度からは、災害復興にかかわる広い意味での「パラダイム」を検討する「復興パラダイム研究会」を新たに立ち上げ、議論を開始することとした。その際、これまでの本研究会の改善点として、深く社会状況を分析し、災害に限らず広く現代社会を検討していくような理論的知見が十分ではなかった点があった。そのため、来年度からは、研究会メンバーに、そうした理論的知見を有する研究者にも参画してもらい、より議論を深めたいと考えている。